

要 旨

価値観が多様化するこれからの時代を生き抜いていくためには、社会的事象を多面的・総合的にとらえ、公正に判断する力が必要になる。そのような力をはぐくむために「判断や意思決定」「自他の考えの比較・検討」を取り入れた学習が大切だと考える。そこで、本研究では、判断や意思決定をさせる場面において、獲得した知識や技能を基に自分の考えを目に見える形にさせたり、話し合いを通して、自他の考えの比較・検討をさせたりしてきた。これらのことにより、社会的な問題に対する関心が高まり、様々な視点から社会的事象を考えることができるようになった。

〈キーワード〉 ①公正な判断 ②意思決定 ③見える化マップ ④自他の考えの比較・検討

1 研究の目標

よりよい社会の実現を目指し、社会的事象を公正に判断できる子どもを育成するために、社会的な問題について考えさせる場面において、獲得した知識や技能を基に自他の考えを比較・検討したり、判断や意思決定をしたりしていく学習指導の在り方を探る。

2 目標設定の趣旨

今日の社会は、価値観の多様化から様々な問題が複雑に絡み合い、時間とともに刻々と変化している。このような状況の中で、これからの時代を生き抜いていく子どもたちには、社会的事象を多面的、総合的にとらえ、公正に判断しながらよりよい社会を形成していく力をはぐくんでいくことが求められる。それは、「比較・関連付け・総合しながら再構成する学習や考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習の充実を図る」¹⁾とする、学習指導要領の「思考力・判断力・表現力の重視」という記述からも見て取れる部分である。

また、平成21年度佐賀県小・中学校学習状況調査の結果から、社会的事象の関連や意味を説明したり、学んだことを基にこれからの社会の在り方について、自分の考えを論述したりすることに課題があることが分かった。このことから、単元の中で、社会的事象の特色や関連、意味などについて考えたり話し合ったりさせ、自分の考えをまとめ、表現させていくことが重要になると考えられる。

これらの課題を解決し、社会的事象を公正に判断する力を育成していくためには、価値観の違いによって問題のとらえ方が分かれ、解決が困難なものが多い社会的な問題を取り上げ、「その解決策の効果について考える」という判断や、「より望ましい解決策を選択・決定する」という意思決定をさせ、それらの根拠について比較・検討させることが有効であると考え。なぜなら、最初は偏った見方での判断や意思決定しかできないかもしれないが、比較・検討を行わせることで、解決策がもたらす効果や、それにかかわる複数の立場など様々な視点があることに気づき、それらを考慮した判断や意思決定ができるようになると思われるからである。このように、様々な視点から多面的・総合的に社会的事象をとらえさせることで、公正に判断することの重要性に気づき、そのような判断や意思決定ができるようになっていくと考える。

なお、このような学習を進めるためには、判断や意思決定の際に必要な知識や技能を明らかにするとともに、それらを基にした判断や意思決定ができるようになったことや、思考力・判断力・表現力が高まったことを児童自身が感じられるようにすることが重要であると考え。

そこで、本研究ではグループの研究テーマ、研究課題を受け、獲得した知識や技能を基に自他の考えを比較・検討したり、判断や意思決定をしたりしながら、社会的事象を公正に判断させる学習指導の在り方を探りたいと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

単元の後半部において、「見える化マップ」を用いて、獲得した知識や技能を基に判断や意思決定をさせたり、自他の考えを比較・検討させたりすれば、様々な視点から社会的事象をとらえられるようになり、公正な判断ができるようになるだろう。

4 研究方法

- (1) 先行研究や文献等により、社会的事象を公正に判断させる指導についての理論研究
- (2) 話し合い活動や意思決定に関する意識調査を基にした児童の実態調査
- (3) 授業を行い、「『見える化マップ』を用いての判断や意思決定」「話し合いによる自他の考えの比較・検討」についての手立ての検証と考察

5 研究内容

- (1) 先行研究や文献等を通して、社会的事象を公正に判断させる指導についての理論研究を行う。
- (2) 話し合うことや意思決定に関する意識調査を基に児童の実態を把握する。
- (3) 所属校の4年生における単元「そのゴミ，どうするの?」「地いきは，どのように発てんしたの?」について授業実践を行い、仮説及び手立ての有効性を検証する。

6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

学習指導要領解説社会編では、公正な判断について、決して一人よがりの判断ではなく、多面的、総合的にとらえることとしている。そのために小原は、意思決定を取り入れた学習の必要性を述べ、意思決定力について「問題を解決するために考えられるすべての解決策の中から、より望ましいものを選択・決定する能力」²⁾としている。また、安野は「対話の仕組み方を工夫すれば、子どもが学習対象を多面的にとらえる、あるいは一見違うと思われることが実は同じ意味を持っているという発見をするなど深まりのある学習が期待できる」³⁾と述べている。判断や意思決定を行わせることで社会的事象に対して一人一人が考えることになるが、それは社会的事象に対して一面的なとらえ方でとどまる可能性もある。そこで、話し合い活動を取り入れることにより、自他の考えが比較・検討され、社会的事象に対して様々な視点を踏まえて判断や意思決定をするようになり、考えが広がったり深まったりすると考えられる。

以上のことから、公正な判断ができる子どもを育成するために、獲得した知識や技能を基に判断や意思決定をさせたり、自他の考えを比較・検討させたりする学習活動が大切になると考える。

- (2) 研究の構想

ア 思考力・表現力を高め、社会的事象を公正に判断できる児童を育成する社会科の学習過程

単元の中に学習問題を2つ設定する。学習問題1では、学習問題2で使わせることを意識しながら、必要となる知識や技能を明確にしていき、それらを獲得させることをねらう。学習問題2では、話し合い活動において、社会的な問題の解決策について判断や意思決定をさせたり、自他の考えの比較・検討を行わせたりすることで、よりよい社会の在り方について考えさせることをねらう。このような学習過程は佐賀県小学校社会科研究会においても進められており、実践例も紹介されている。しかし、獲得した知識や技能が判断や意思決定に十分生かされていなかったり、判断や意思決定の根拠があいまいなものになり、思考の深まりが十分でなかったりするなどの課題

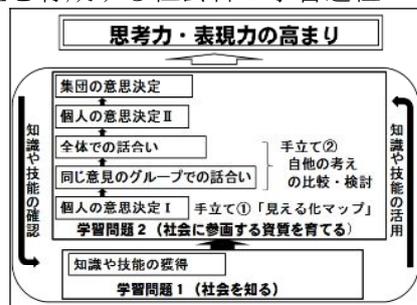


図1 学習過程

があると考える。そこで、本研究では学習問題1と2の内容の関連を児童が意識できるようにし、獲得した知識や技能を基に考えさせたり、話し合わせたりする。このようにすることで、様々な視点から社会的事象をとらえられるようになり、思考力・表現力は高まると考える(前頁図1)。

イ 検証の視点と手立てについて

仮説を検証するために、次の2つの視点を定めて、研究を進めた。

(ア) 【視点Ⅰ】「見える化マップ」を使っての判断や意思決定と、獲得した知識や技能との関連

学習問題2において意思決定させるためには、解決策の効果を考えるという判断をさせる必要がある。その際、自分の判断を目に見える形にし、考えを整理しやすくするために作成したのが「見える化マップ」(図2)である。

「見える化マップ」は3つの観点からなり、それぞれの観点について4段階の期待値を設定する。観点とは「解決策の効果」を表すものであり、複数の解決策を絞り込む話合いの中で「解決策の良さ」として挙げられた言葉を基に決めていく。期待値とは、「解決策による現状の変容具合を予想し、数値化したもの」である。本研究においては、期待値を付けることを判断する場面ととらえ、学習問題1で使用した資料を基に数値化することで、児童に点数のイメージをもたせやすくする。また、期待値をつける際には、それぞれの観点に関する6つの枠に、獲得した知識や技能を基に判断の根拠を記述させる。実際の場面では、まず、期待値の基準を提示し、観点ごとに根拠を記述させながら期待値を付けさせ、「見える化マップ」上に円を描かせる。次に、円の位置関係に着目させ、判断の根拠や期待値を基に意思決定をさせ、その根拠を書かせる。これらのことにより、「この観点に関して3と2を付けたけど、本当にこれでいいのか」というように自分の判断の見直しをさせることができる。また、自他の意思決定を比較・検討させる際にも、それぞれの判断を比べながら意見交換をさせることができ、互いの考えを広げたり深めたりするのに役立つと考える。

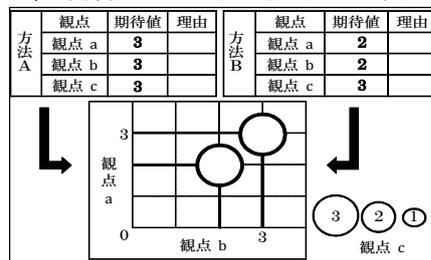


図2 「見える化マップ」の例

このように「見える化マップ」を使って解決策について判断や意思決定をしたり、比較・検討しながら自分の考えを修正したりする際に、獲得した知識や技能がどれくらい使われているかを検証する。

(イ) 【視点Ⅱ】話合いにおける自他の考えの比較・検討による考えの広がりや深まり

様々な視点から多面的・総合的に社会的事象をとらえさせ、互いの考えを広げたり深めたりさせていくためには、考えたことを自分の言葉でまとめて伝え合わせる必要がある。そこで、「同じ意見のグループでの話合い」「全体での話合い」という2段階で話合いを行わせる。

前者では、同じような意思決定の根拠が書かれていることを知ることで、自分の意思決定に自信をもたせたり、選んだ方法は同じでも根拠には違いがあることに気付かせることで、様々な視点を考慮することの大切さを感じさせたりする。後者では、自他の根拠の違いに着目させながら比較・検討させたり、必要に応じて自分の考えを修正させたりする。よりよい解決策について意思決定させる過程において、自他の考えを比較・検討させる活動を取り入れることで、考えが広がったり深まったりし、社会的事象を公正に判断することにつながっていくと考える。

このような話合いを通して、意思決定の根拠に記されている視点の数が増えたかどうかで考えの広がりを、より詳しい記述ができるようになったかどうかで考えの深まりを検証する。

(3) 検証授業① 第4学年 単元名「そのゴミ、どうするの?」～武雄市のゴミ減量対策について考えよう～(全10時間)

ア 単元の概略

まず、武雄市のゴミの現状について調べる学習問題1を設定し、ゴミに関する課題に気付かせ

ていった。次に、課題に対する市の施策の中で一番良い方法はどれか考える学習問題2を設定し、「見える化マップ」に記入させたり、話し合わせたりして意思決定を行わせた(表1)。

表1 「そのゴミ、どうするの？」単元計画

時	学習過程	主な学習活動
1～4	学習問題1	○武雄市のゴミの現状や課題について調べる。 ○課題に対する市の施策を知る。
5～10	学習問題2	○施策の良さを考えながら絞り込む(検証授業①-1)。 ○「見える化マップ」を作成し、個人の意思決定Iを行う(検証授業①-2)。 ○グループの話合い、全体での話合いを通して、自他の考えの比較・検討を行い、個人の意思決定II、集団の意思決定を行う(検証授業①-3)。 ○「ゴミの少ないまちづくり」というテーマで作文を書く。

イ 「見える化マップ」を使っての判断や意思決定と、獲得した知識や技能との関連(視点I)

まず、検証授業①-1において、市の担当者にゴミ減量策を話してもらった。施策を理解させた上で、「6つある施策の中のどれを優先的に進めた方が効果的か」という発問をして学習問題2を設定した。児童の発達の段階や生活経験を考慮し、話合いを焦点化した方が判断や意思決定をしやすくなると考え、6つの施策を2つに絞り込む話合いを行った。その過程において施策の良さについて考えさせることで、施策を比較するための観点(削減量・持続性・広がり)に気付かせるようにした。

次に、絞り込まれた2つの施策(分別回収の推進・エコバックの推進)について、どちらがより効果

的かを考えさせるために、検証授業①-2において「見える化マップ」を作成させた。獲得した知識や技能を基に判断の根拠を記述させるために、掲示している資料やファイルに目を向けるように声掛けをした。また、全員に同じ基準で判断させるために、学習問題1で使用した資料を使って作成した期待値の基準を提示した(表2)。

さらに、意思決定の根拠を記述させる際、評価の基準(表3)を提示した。自分の考えを論述する際に必要と思われる項目を取り上げることで、児童に「どのように書けばいいか」を理解させ、獲得した知識や技能を使わせたり、より説得力のある記述にさせたりしたいと考えた。児童が記述した後「根拠の内容」と「観点数」のそれぞれから評価を行い、その結果を児童に伝え、論述として十分な部分や、足りない部分などに気付かせるようにした。

表2 期待値の基準

観点	4	3	2	1
可燃ゴミは減るかな	可燃ゴミが たくさん 減っていく	可燃ゴミが 少しずつ 減っていく	今とあまり 変わらない	
どれくらい 続く かな	ずっと 取り組んでもらえる	一年くらい 取り組んでもらえる	数週間から一ヶ月 取り組んでもらえる	一週間も 続かない
たくさんの人に 広がる かな	市民の 80%以上 (4万5千人以上)が取り組んでくれる	市民の 80%以上 (4万人以上)が取り組んでくれる	市民の 60%以上 (3万人以上)が取り組んでくれる	今と変わらない

表3 意思決定の評価の基準

	根拠の内容	観点数
A	具体的な資料を基に理由を書くことができる	3つの観点のうち、 2つ以上 について書くことができる
B	理由を書くことができる	3つの観点のうち、 いずれか について書くことができる
C	理由を書くことができない	3つの観点到触れていない

ウ 話合いにおける自他の考えの比較・検討による考えの広がりや深まり(視点II)

まず、同じ施策を選んだ者同士による話合いを行い、グループの考えをまとめさせるようにした。判断や意思決定の根拠について意見交換させたことで、様々な視点に気付くことができていた。

次に、検証授業①-3において、全体での話合いを行った。互いの考えを確認しながら質疑応答ができるように、グループで作成した「見える化マップ」を事前に公開して質問や意見を考えさせた。また、授業では、判断の根拠を書いた短冊を観点ごとに黒板に貼り、出された意見を記入し、考えを整理しやすいようにした(図3)。

分別(実線) エコ(点線)	ゴミは減るかな	広がるかな	続くかな
<p>プラスチックの分別</p>	<p>プラを分別すると645.5トン減らすことができる</p> <p>リサイクル可能なプラが多い</p> <p>その他のプラ6.5%を絶対減らせるわけではない</p> <p>ほんのちよつと心がけ</p>	<p>最初にゴミ箱を3つに分ける</p> <p>高橋市のように毎日ゴミを出せるようにする</p> <p>分別して持ってきた人に景品をあげる</p>	<p>景品をあげることで続く</p>
<p>エコバッグの推進</p>	<p>148.5トン減る</p>	<p>エコバッグを売ったり配ったりすることで減る</p> <p>お店でも売っている</p> <p>知っている人が51%。知らない人も見たらするようになる</p>	<p>バックに入れておくだけですぐできる</p> <p>バックに入れておくだけで荷物にならない</p> <p>簡単</p> <p>何度も使える</p>

図3 話合い時の板書(検証授業①-3)

「自分たちは4と考えたのに、なぜそちらは2にしたのですか」「分別してきた人に景品をあげると書いてありますが、誰が、何をあげるのですか」などの発言が出るなど、黒板の掲示物を利用しながら

ら意見交換を行うことができていた。

エ 検証授業①の課題

「見える化マップ」に記した判断の根拠と獲得した知識や技能との関連を見ると、根拠を記す全6枠の中に学習した内容を4枠以上記入した児童が8名、それ以下の児童が9名だった。記述内容については、自分が良いと思う方には長所を記し、他方には短所を記している児童が見られた。これは、どちらを選ぶかを先に考え、その後で根拠を書いたためと考えられる。また、自他の意思決定の比較・検討においても、それぞれの施策の良さを認めた上で比較している児童は少なかった。したがって、それぞれの施策の良さを考えて判断するということができていなかったのではないかと考えられる。これらのことから、獲得した知識や技能を使わせたり、施策の良さを踏まえて判断や意思決定をさせたりする活動のさらなる工夫が必要であると感じた。

(4) 検証授業② 第4学年 単元名「地いきは、どのように発てんしたの？」～10年後の武雄市の姿を描こう～(全14時間)

ア 単元の概略

まず、地域の発展に関わった先人の働きや苦心について調べる学習問題1を設定し、人々の願いをもとに生活が良くなってきたことを理解させた。次に、市民の意識調査等から、今後のまちづくりに目を向けさせ、市の施策について優先順位を決定する学習問題2を設定し、「見える化マップ」に記入させたりたり、話し合わせたりして意思決定を行わせた(表4)。

表4 「地いきは、どのように発てんしたの？」単元計画

時	学習過程	主な学習活動
1～8	学習問題1	○地域の発展に関わった先人について調べ、働きや苦心について理解する。 ○市民の願いについて考え(検証授業②-1)、まちづくりに対する市の施策を知る。
9～14	学習問題2	○施策の良さを考えながら絞り込む(検証授業②-2)。 ○「見える化マップ」を作成し、個人的意思決定Iを行う。 ○グループの話合い、全体での話合いを通して、自他の考えの比較・検討を行い、個人的意思決定II、集団的意思決定を行う(検証授業②-3)。 ○「10年後の武雄市の姿」というテーマで作文を書く。

イ 「見える化マップ」を使つての判断や意思決定と、獲得した知識や技能との関連(視点I)

検証授業①での課題を受け、判断や意思決定をする際に使えるように、市民や観光客へのアンケートを資料として提示し、「現状に対する市民や観光客の意識」や市民が感じる「まちづくりの課題」を明らかにした。また、検証授業②-2においては、先人の働きと関連のある「生活基盤の整備」に関する3つの施策を取り上げ、それぞれの細かい内容を理解させた上で施策を2つに絞り込んだ。検証授業①と同様に、2つの施策(安全なまちづくり・魅力あるまちづくり)の良さについて考えさせる過程で、観点(住みやすさ・武雄らしさ・人の集まり)を導き出させた。

これらの活動を経て、「見える化マップ」を書く際には、提示した資料を見ながら期待値を付けるように声掛けを行った。検証授業①では期待値の基準を提示したが、検証授業②では児童と一緒に考えることで、「現状の変容具合」という期待値の意味を理解させるようにした。

ウ 話合いにおける自他の考えの比較・検討による考えの広がりや深まり(視点II)

検証授業①での課題を受けて施策の良さに着目させてきたことにより、グループの話合い後の意思決定の根拠の数は検証授業①よりも増えていた。また、獲得した知識や技能を基に、より詳しい記述ができていた。検証授業②-3の全体の話合いにおいては、それぞれの施策の良さを認めた上で「より望ましいのはどちらか」を考えさせるようにした。児童は、「高齢者にとって必要なのはバリアフリーか安全か」「武雄らしさをPRするためにはケーブルテレビがいいかホームページがいいか」などの論点を自分達で導き出しながら意見交換を行った。

(5) 検証結果と考察

ア 【視点I】「見える化マップ」を使っての判断や意思決定と、獲得した知識や技能との関連

判断や意思決定の根拠と、獲得した知識や技能との関連について検証した。「見える化マップ」における、獲得した知識や技能との関連が見られる根拠の数を示したのが右の表5である。検証授業①では、6 枠全てに記述した児童が0名だったのに対し、検証授業②では、9名の児童が図4のS児のように6 枠全てに記述していた。全体でも4 枠以上記述している児童が8名から15名に増えていた。このことから、獲得した知識や技能を基に、解決策に対する良さや問題点を考えながら判断していることが分かる。このように、根拠をはっきりさせながら判断させることで、筋道を立てて考えることができるようになってきたと考えられる。

表5 知識や技能を基にした記述

	1 枠	2 枠	3 枠	4 枠	5 枠	6 枠
検証授業①	4	3	2	3	5	0
検証授業②	0	1	1	2	4	9

(単位:人)

また、「見える化マップ」と意思決定Iとの関連について、「見える化マップ」を基にした意思決定が行われたか検証した。3つの観点に対する期待値の総計で見ると、検証授業①では、総計の多い方を選択した児童が17名中13名で、総計が同数だった児童が4名いた。検証授業②では、総計の多い方を選択した児童が17名中11名で、総計が同数だった児童が6名いた。意思決定Iの根拠を見ると、検証授業①も②も全ての児童が獲得した知識や技能を根拠に挙げる事ができており、同数だった児童もS児のように自分が一番大切だと思う観点を挙げながら根拠を記述することができていた(図5)。このことから、より多くの視点を考慮して判断したことが意思決定に生かされ、施策について総合的にとらえ、よりよいまちづくりの在り方について公正に判断することができるようになったと考えられる。

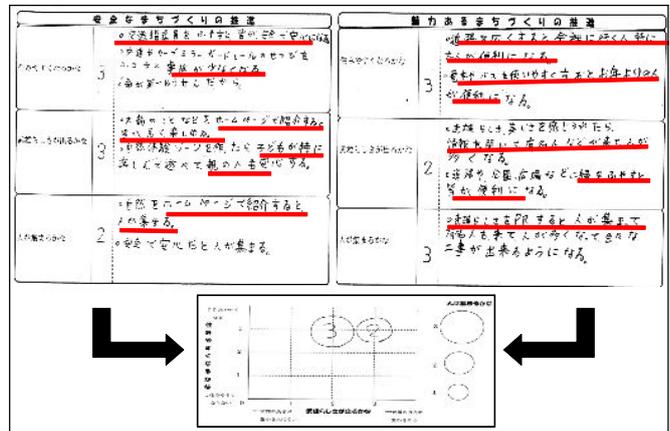


図4 検証授業②のS児の記述

さらに、児童が「見える化マップ」を使って考えることに対してどのように感じているか意識調査を行った。「『見える化マップ』は、考えをまとめる時に役に立ったか」という質問に対する答えを示したのが図6である。「あまり役に立たなかった」と答えた児童が3名から1名に減り、その分「とても役に立った」と答えた児童が6名から8名に増えている。児童の回答にも「頭の中が

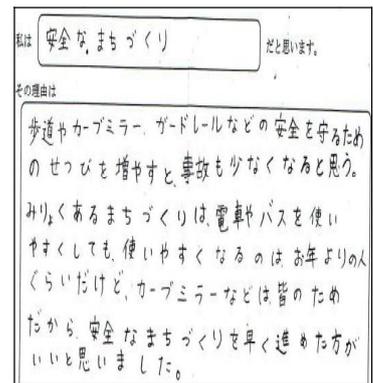


図5 S児の意思決定I

ごちゃごちゃになった時、とても役に立った」「数字では分かりにくいけど、『見える化マップ』に書くと分かりやすかった」という記述が見られた。このことから、検証授業②において施策の良さに着目させて判断の根拠として記入させたり、「見える化マップ」上に円を描かせたりしたことで、自分の考えが目に見える形になり、考えを整理しやすくなったと考えられる。

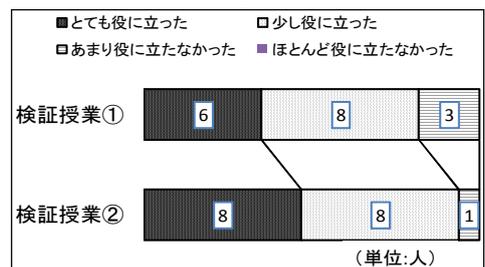


図6 児童の意識

これらのことから、学習問題1で獲得した知識や技能を基に判断や意思決定をさせたり、自分の考えを整理しながら様々な視点を踏まえて総合的にとらえさせたりするためには、「見える化マップ」は有効な手立てであると考えられる。

イ 【視点Ⅱ】 話し合いにおける自他の考えの比較・検討による考えの広がりや深まり
 まず、話し合いによる考えの変容を、検証授業②での抽出児の記述(表6)を使って検証した。

表6 抽出児のプロフィールと、意思決定Ⅰ・Ⅱの記述

抽出児	K児	F児
プロフィール	学習問題に対し、考えることが分かって活動を進める。資料などの読み取りはできるが、自分の考えをまとめて論述することは苦手としている。	学習問題に対し、考えなければいけない事が分からないことがある。資料などの読み取りが苦手で、自分の考えをまとめて論述するのも時間がかかる。
意思決定Ⅰ (話し合い前)	私は「安全な町作り」だと思います。 その理由は 安全な町作りでは歩道を広くしたりガードレールや信号をつけることでも安全だけれど、ではなくみんなに安全にさせることで、みんなが安心して通うことができたりバスを多く走らせたり高い車を中心にするので、歩みやすい環境に立つと考えると安全な町作りなので安全な町作りになりました。	私は「安全なまちづくり」だと思います。 その理由は 安全だといくつもあるまちづくりがよかったけど安全だとみよくもできるかなとおもいました。よいいちゃんとおはあちゃんのためにもなるし、せなら安全が……などおもいました。あと、よいいちゃんとおはあちゃんたちがよくいもりに行くときカーブミラーやガードレールがあると安全で……とおもいます。
意思決定Ⅱ (話し合い後)	私は「安全な町作り」だと思います。 その理由は 安全な町作りでは歩道を広くしたりガードレールや信号をつけることでも安全だけれど、ではなくみんなに安全にさせることで、みんなが安心して通うことができたりバスを多く走らせたり高い車を中心にするので、歩みやすい環境に立つと考えると安全な町作りなので安全な町作りになりました。	私は「安全なまちづくり」だと思います。 その理由は みよくあるとより集まると……けど安全だとこわいし、またあかるい安全になるから……とおもいます。 でもよいいちゃんとおはあちゃんもよかったけど安全だとみよくかすこしは……とおもいました。よいいちゃんとおはあちゃんのためにもなるし、せなら安全が……などおもいました。あと、よいいちゃんとおはあちゃんたちがよくいもりに行くとき、カーブミラーやガードレールがあると安全で……とおもいます。あと、よいいちゃんとおはあちゃんたちがよくいもりに行くとき、カーブミラーやガードレールがあると安全で……とおもいます。あと、よいいちゃんとおはあちゃんたちがよくいもりに行くとき、カーブミラーやガードレールがあると安全で……とおもいます。

K児の記述を見ると、意思決定Ⅰでは、施策の良さ(点線囲)を1つずつ記述しているが、意思決定Ⅱでは、他の良さについても考えて視点の数が増えている。さらに、意思決定Ⅰでは「住みやすさ」の観点にしか触れていないが、意思決定Ⅱでは「人の集まり」についても触れている。また、他方の施策よりも優位な点について、自分の考えをより詳しく記述できている(実線囲)。

F児の記述を見ると、意思決定Ⅰでは、施策の良さを1つ記述しているが、意思決定Ⅱでは、K児と同様に、他の良さについても考えて視点の数が増えている。観点については、意思決定Ⅰでは「住みやすさ」にしか触れていないが、意思決定Ⅱでは「武雄らしさ」についても触れている。また、友達の発言を引用しながら自分の考えを記述したり(実線部)、「魅力あるまちづくり」よりも「安全なまちづくり」を選んだ理由について詳しく記述したりしている(記述前半部分)。

このことから、2人の抽出児は話し合いにおいて、友達の意見を参考にしながら自分の考えを見直し、新たな視点を加えたり、より詳しく記述したりできるようになり、考えが広がったり深まったりしたことがうかがえる。

次に、学級全体の変容を検証した。次頁図7は意思決定の根拠の内容、次頁図8は意思決定の記述に見られる観点の数である。検証授業①でも②でも、具体的な資料を使いながらの記述や、触れている観点の数が意思決定ⅠよりⅡの方が増えている事が分かった。また、意思決定Ⅰの記述で検証授業①と②を比べると、検証授業②の方が具体的な資料を基に考えたり、複数の観点に触れている児童が多いことが分かった。これらのことから、自他の考えを比較・検討することで、根拠となる視点の数が増えたり、より詳しい記述ができるようになったりして、考えが広がったり深まったりしていくといえる。また、このような学習を繰り返すことで、獲得した知識や技能を基に、様々な視点を踏まえた意思決定ができるようになると言える。しかし、B基準の児童も2割近くいるため、一緒に資料を見て考えるなど個別指導のさらなる工夫が必要になると考える。

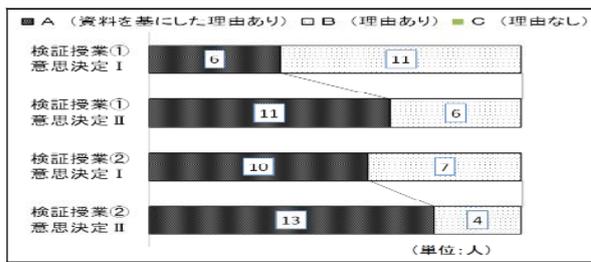


図7 根拠の内容

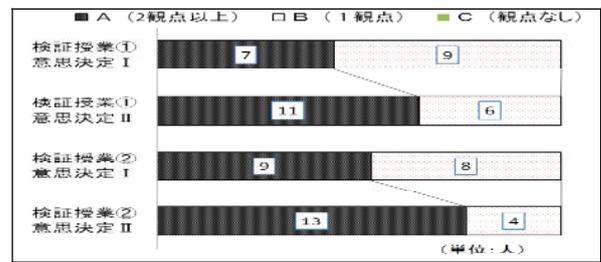


図8 根拠に記述している観点の数

また、学習後に書かせた「10年後の武雄市の姿」という作文の中に「自分にできることは何か探したい」「市民の1人として」という記述が見られるなど、よりよい社会の実現に向けて、社会に参画していこうとする意欲が感じられた記述をしていた児童が10名いた。この点から見ても、考えが広がったり深まったりしたことがうかがえる。

さらに、「自分自身の考えの広がりや深まり」に対する児童の意識調査を行った。「話し合い前後で考えが広がったり深まったりしたと思うか」という質問に対する児童の答えを示したのが図9である。「あまり思わない」と答えた児童が5名から3名に減り、その分「少し思う」と答えた児童が6名から8名に増えている。



図9 児童の意識

児童の回答にも「理由が増えて、書く内容も詳しくなったから」「みんなの意見を聞いて、『なるほど』と思ったから」という記述が見られた。このことから、考えの広がりや深まりを実感できている児童が多くいたことが分かった。なお、実感できていない3名の児童の記述にも変容が見られるものがあるので、児童自身が実感できるような評価の仕方のさらなる工夫も必要になると考えられる。

これらのことから、社会的事象を様々な視点からとらえさせ、公正な判断ができるようにするためには、話し合いにおいて自他の考えを比較・検討させることが有効だと考えられる。

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

- ア 「見える化マップ」を用いて、自分の考えを目に見える形にさせたことで、獲得した知識や技能を基に、根拠をはっきりさせながら意思決定をさせることができた。
- イ 話し合いを2段階で行ったことで、それぞれの解決策の良さを認めつつも、より効果的なのはどちらかについて様々な視点から考え、公正な判断ができるようになった。
- ウ 社会的な問題の解決策について優先順位を考えさせたことで、より望ましい解決策の在り方や、よりよい社会の在り方に対する自分の考えをもたせることができた。

(2) 今後の課題

- ア 意思決定における児童の変容や、思考力・表現力の高まりに関する評価の在り方
- イ 社会的な問題に対する解決策の立案をさせ、意思決定させる活動の工夫

《引用文献》

- 1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説社会編』 平成20年 東洋館出版 p. 4
- 2) 森分 孝治・片上 宗二編集 『社会科重要用語300の基礎知識』 2000年 明治図書 p. 69
- 3) 安野 功 『社会科授業が対話型になっていますか』 2005年 明治図書 p. 66

《参考文献》

- ・ 日本社会科教育学会編 『社会科教育事典』 2000年 ぎょうせい

